

## コメント

### “Journal-driven Research” を越えて

——生き活きとした、国際的で「社会的」な学術コミュニケーションに必要なこととは何か？  
メディア特性から考えてみる——

京都大学学術出版会 鈴木哲也

大変興味深いお話をありがとうございました。

国際発信ということを考えると、私ども京都大学学術出版会では年間70冊ぐらい本を出していますが、そのうち1割が英語の本です。これは日本の出版社で全くほかにはないと自負しています。20年間それを続けてきて、ようやく昨年、これは自慢して良いと思っていますが、米国大学・研究図書館協会（ACRL）が発行する学術書等の書評誌『Choice』が選定した「Outstanding Academic Titles」のトップ25に小会が発行した英文書が選ばれました。こうした経験を踏まえながら、今日はお三方とは少し違う角度からコメントしてみたいと思います。

一昨年、私は、『学術書を書く』（鈴木 哲也，高瀬 桃子（著），京都大学学術出版会）という本を書きました。率直に言って、最近、紀要にもジャーナルにも本にも、同じような論文が投稿されてしまっていると言って良い。そもそもメディア（媒体）というのは、読者対象も部数も、投稿／執筆する際のルールもそれぞれずいぶん違うのですが、そうしたメディアの違いや特性を全く無視して、本にもジャーナルにも紀要にも同じように論文を書くことになってしまっているように思います。そこで、この本では、まず、メディアの特性ごとに書き方を変えてみようよという話をしました。その中身はこの本を読んでいただくとして、今日の話で私が非常に関心があるのは、さまざまな学術コミュニケーションのメディアがあるにもかかわらず、今、過剰に学術雑誌、特に、いわゆるサイテーションインデックス(CI)に登録されている雑誌が重視されているのではないかということです。

それがどのような学術コミュニケーションのゆがみを起こしているかという、例えば、2008年の『サイエンス』誌で、エバンズ<sup>1</sup>は、electronic publication、要するに雑誌が電子化されるなかで（今日も電子化、オンラインという話がありましたが）、実は引用される論文の数が限られてきて、また引用される論文の発行年がどんどん新しくなっている、つまり、特定の論文だけがあつという間に消費される状況がある、と言っています。また、やはり『サイエンス』誌に載ったハミルトン<sup>2</sup>の論文によると、CI登録雑誌の掲載論文は、実はほとんど読まれていない、例えば、人文学や美術学だと98.0%の論文は一度も引用されていない、ということが指摘されています。これを使って、チェイニー<sup>3</sup>（父子両ブッシュ政権の支柱となったあのディッ

<sup>1</sup> Evans, James A. 2008. Electronic Publication and the Narrowing of Science and Scholarship. *Science* 321: 395-399/

<sup>2</sup> Hamilton, D. 1991. Research Papers: Who's uncited Now? *Science* 251: 25.

<sup>3</sup> Cheney, L. 1991. Foolish and Insignificant Research in the Humanities. *The Chronicle of Higher Education*. July 17.

ク・チェイニーの奥さんですが)は、「人文学はいかに愚かで無意味か」なんて論文を書いています、それは違う。むしろ、学術雑誌の重みというのは、領域によって違う、領域によって本が重要なときもあれば、紀要みたいなものが重要になるときもある、ということで、いわゆる雑誌だけで計っちゃだめでしょうということはこの二つの論文は示している、と私は考えます。

もちろん、自他共に認めるトップジャーナルに掲載されることは、学者として誇れる業績であることは間違いありません。しかし、ある雑誌がCI登録誌であるか否かなんてこと自体はそんなに重要なのかなと思います。その点、去年4月に『日経新聞』に載った記事に、私は非常に驚きました。広島大学では、教員を評価する、いわゆるAKPI(目標達成型重要業績指, Achievement-motivated Key Performance Indicators)を導入しましたが、その中に「Science Citation Indexに登録した雑誌に投稿すると300ポイント与える」という項目があるということです。この見識の低さには正直呆れました。実際には誰も読んでいない雑誌でも、とにかくCIに登録されているというだけで、そこに発表すればそれでいいのか。要するに、今の時代、学術雑誌があまりに偏重されていて、しかもそれが、研究者個人や研究機関の「格づけ」の道具になってしまっているというのが、一番大きな問題だと私は思っています。それによって、研究現場はむしろ疲弊してしまっているというのが実際のところでしょう。

こういう状況を踏まえて、では、今学術コミュニケーションに何が必要なかと考えてみるのも面白いと思ったのです。

最近、こんなものを見つけました。「Journal of Negative Research」という、実はこれは一種の運動らしいですね。ここに紹介したのは生態学系の雑誌ですが、このステートメントを読むと面白い。要するに、先ほど査読という話もありましたが、査読において「意味がある」とされた研究ばかりが雑誌に載る。ところが、実際には生物の世界には、査読者が「意味がある」と思う以外の事柄がたくさんあるわけで、そういう「無意味」なものが載らない学術雑誌というのは、どうも変なかたちで生物の世界をリプレゼンしてしまうのではないか。そういう危機感から、むしろいわゆる「査読誌」が採択しない研究成果について、もっともっと取り上げなければいけないのではないか、そういう思いからジャーナルを立ち上げましたとあります。こうした動きは生態学の他にもあるようですね。心理学にもを見つけました。

しかし、イグノーベル賞なんていうのもそうした理念に共通するのかも知れませんが、「無意味でも良いじゃないか」と言っても、それだけでは誰も注目しない。やはり、ある種とんがった主張——日本語でとがったというのは、英語で言えばいわゆるアキュイティでしょうか——そういう特徴のあることをしないと、ほとんど誰も読まないジャーナルばかりがどんどん増えてしまうのではないかなとも私は思います。このことに関わって、先ほどブリーン先生より雑誌の特集号の話がありましたが、オープンアクセスとの関係で非常に面白い取組だと思ったのは、Open Library of Humanities (<https://www.openlibhums.org/>、これもイギリスの有名なオンラインのデータベースですが)を主催しているMartin Eveさんの取り組みです。Eveさんとは、NIIでのセミナーと一緒にパネリストを務めたのですが、トマス・ピンチョンの研究者で、Open Library of Humanitiesに投稿された無数の論文の中から、エディター自身が関心のあるものを

選んで、いわゆる「オーバーレイジャーナル」を作っている、という話を紹介してくれたのですね。その一つが『Pynchon Notes』（<https://pynchonnotes.openlibhums.org/>）というもので、これが非常によく売れているのだそうです。ピンチョンですから、日本などではあまりたくさん読者はいない。けれども、ピンチョンに関しては、どんな情報でも欲しいというマニアックな人々が世界中にいるというのがこの作家の特徴ですから、とにかくそういうものをつくったら大変よく売れたという話です。いわば、どんどん投稿を受けつけて発表させる一方で、そうした研究の中から、何か特徴づけて選び取ったものを纏めていくと、非常に注目をされるものになるのではないかと。

その点で、例えば、今、京都大学の方が多いと思いますが、京大にはたくさんオープンジャーナルというか、いわゆる紀要があります。例えば、防災研と東南ア研とそれぞれに違った媒体を持っておられますが、中を見てみると、結構共通した 이슈が扱われている。例えば、インドの水資源の話、安全な水をどうやって供給するかなんて話は、民族誌の側から書いている人がいる一方で、土木工学とか河川工学という立場で書いている人もいます。これらの論文を全部合わせて見てみると、結構面白い「オーバーレイジャーナル」になるのではないかと。そういう努力や工夫も要るのでないかと。今日はせっかくさまざまなセクターの方が来られているわけですから、単独でそれぞれ活動するのではなくて、全体として皆で協力をすると、こういうアクティビティが示せるのではないかと。もちろんどうやって Scopus に申請するか、Web of Science に申請するかというようなことについての情報交換も必要だとは思いますが、お互いにおたくにはどんな論文が載っているのかといったことを見ると、結構面白い協働ができるのではないかと。

その点で、今日はリサーチアドミニストレーターの方がたくさんいられていますが、私も少しだけ協力をして、本で京大の全体像を示すという、「京大新刊情報ポータル」

(<http://pubs.research.kyoto-u.ac.jp/>) を京大の学術支援室が立ち上げました。その後の話を聞くと、それこそアクセス数ではありませんが、社会一般は何に関心を持っているのか、意外なことが分かる。例えば、学術出版の世界では文学研究書は本当に売れなくなってきたのですが、ポータルサイトへのアクセス数という点では、文学が一番多い。これは何故か？ もしかしたら、一般の人々が文学研究へ期待するものと、大学での研究が上手くマッチしていないのではないかと、という示唆もあります。また研究者間の交流という意味でも、とても面白い成果が上がっていますよね。その点で、せっかくこういう機会なわけですから、さまざまなノウハウの協働と同時に、中身の、コンテンツでの協働をすると、京都大学らしいとか、京都らしいとか、あるいは日本らしい発信の仕方ができるのでないかなと思います。そういう意味で、先ほど

「ジャーナルタイトルから日文研という言葉を取りました」という話がブリン先生からありましたが、垣根を越えて広く協働する立場で話を進めていくことができるのではないかなと思っています。